

## 文法は「文節」からスタートです

暑いぐらいの日が続きますね。たまには外に出ていますか。リフレッシュのためには外の空気を吸ってみてね。

一年生の皆さん、前回の問題わかりましたか。一年生の国語の教科書に施されている工夫ですよ。答えは、一文が細切れになって、間かくが空いている」ということです。これが大切なのです。文法の授業もここからスタートです。

(むかし、ある山おくに、きこりのふうふがすんでいました。)

むかし、ある山おくに、きこりのふうふがすんでいました。

教科書には、左のように書かれていますよね。「、」があるところも切れ目です。日本語の文は、このように「意味がわかる程度の最小の単位」が組み合わさって成り立っています。この最小の単位のことを「文節(ぶんせつ)」と言います。右の文は七つの文節からなり立っていると言えます。

「節」を訓読みすると「ふし」ですね。「節」と言えば「竹」がイメージされますよね。切れ目があるという点で、教科書の文とよく似ているしょ。「文」の「節」だから「文節」と覚えるといいかもね。

この文節は見つけ方があります。それはグラウンドで結構速いペースで数周走ってか



らすぐこの一文を読むのです。すると、息が切れるから、私たちは自然と文を切って読んでしまいます。その切ったところが切れ目となります。

でも、文節という切れ目を見つける度に、グラウンドを走っていたらたまったものではないよね。そこで、座っていても見つける方法を教えましょう。

それは、目の前に幼児がいると思って、念を押すようにゆっくりと読み聞かせるとい方法です。そうですね、念を押すために、「ね」を入れて読むといいかもしれないね。

むかしね、あるね 山おくにね、きこりのね ふうふがね すんでね いましたね。

こうやって読むと、幼い子はワクワクするかもよ。そのうち「ね」をつけなくても文節に切ることができるようになるからね。この後出てくる「単語」の勉強をする頃かな。しかし、大切なのは、私たち日本語を話す人間は、日常的に文節をつなげて文を書いたり話したりしているということを実感することだね。実感してる？

(五月十二日)